

# 小俣姓の末えい 夕力女から

「続峡中家歴鑑」という本がある。明治二十五年十月の印刷で、同年同月の出版である。山梨県平民米山信八という甲府市、遠光寺に居住する人物の編集である。一部、二部と二冊に収録された甲州の人物伝である。

各地域の旧家を探訪して古書旧記を収集し、その家の古事来歴をくまなく探索してまとめたものである。

中には、「姓ハ藤原ソノ祖ハ大織冠鎌足ヨリ出ツ」というような、日本歴史の古代史に直結するような出自もあって、真実ならと心をときめかせるような記述もあるが、それはそれとして甲斐国、山梨峡中の各地の名門、あるいはその出自を探る一助にこの「峡中家歴鑑」はなるのではなからうかと思う。

郡内地区、とくに大月市については、他地区にみられる武田氏とかかわる文書や事歴があまりないのは、小山田氏との関係からかとも思われるが、資料が意図的にかあるいは自然に消滅した結果であるとも考えられよう。

この「続峡中家歴鑑」に採録された人物は三〇八人

で、現在の太月市では四十人である。その内訳を地域別にみると、初狩十二人、大月十人、賑岡六人、七保四人、猿橋四人、笹子三人、富浜一人、梁川一人となっている。

その出自をみると、「桓武天皇」「藤原鎌足」「源為朝」「清和天皇」「新羅三郎義光」「武田家の一族」というように、日本歴史の著名人をまず引き合いに出して、歴代の事績を並べている。これは家系図の作成によく使われている手段で、かなり割引いて読み取る必要がある部分である。しかし、そうした中にも、その家の先祖が努力し、確実に構築した事績を見逃してはならないと思う。苦心した跡を発見し読み取ることは大事なことである。

この「家歴鑑」に記載されている大月市の四十一人の中で、一人を選ぶとすれば「小俣夕力」である。

まず、「続峡中家歴鑑」に記述されている文章を読んでみよう。

小俣夕力 北都留郡（現大月市）賑岡村（賑岡町）奥山組にあり、古書類の存するものなきをもって調べ

るよしなく、菩提所全福寺につきて鬼籍簿（寺の過去帳）により知得せるものを記すれば、享徳三年（一四五四）中、五郎なるものを初代にして、名主役（村長職）を勤務せり。二代五郎、

当村、葛籠（つづら）峠へ天神社を建設せり。三代武一郎、四代三郎右衛門、五代武一郎にして（累代名主役を勤務せりという）、六代五郎をへて七代を藤八郎という。寛永十四年（一六三七）藤八、三郎兵衛両名を分家す。八代三郎右衛門名主役を勤務す。九代岡右衛門、二男を連れて分家す。十代岡右衛門、地券再縄受（土地を測量すること）に際す。当時の帳簿に名主役と肩書きせり。十一代岡右衛門、弟権兵衛を分家す。十二代彦兵衛という。十三代三郎右衛門、数年名主役を勤務せり。明治二十年死去し、当代次いで即ち十四代とす。ちなみに記す。奥山組、春日大神の社は長享二年（一四八八）中、五郎の勸請したるものなりと云う。

ここで「甲斐国志」を見てみよう。神社の部に「奥山春日明神」とあり、続

いて「葛籠山天神宮、社地方三町、下々畑八畝二十四歩、大豆九斗四合」の記述がみえる。

次に「山梨県神社誌」をみると、「春日神社、鎮座地賑岡町奥山奥平三三三七、祭神天児屋根命（あめのこやねのみこと）（以下三神略）」と由緒沿革が続いて、大同二年（八〇七）に、奥山村の小俣氏が大和奈良の春日大社より勸請し、村の中央の丘陵地に社殿を造営したのに始まると記している。大同二年はおくとして小俣氏のかかわりは史実として考えてよいと思う。

次に、小俣氏による葛籠峠の天神社建設である。賑岡町の奥山地区は、この葛籠峠、通称天神峠によって東西に分かれている。西奥山と東奥山である。

た。夫人は敵の襲来と思つて抱いていた赤児を谷底に投げ捨てた。そこは稚児落として今呼ばれている。夫人は従者と共に峠にたどり着いた。その時従者の一人小幡某が背負っていた葛籠が重くなったので、それを投げ捨てたところから葛籠峠と呼ばれるようになったという。

そして後に、小俣氏がここに天神社を建設したので天神峠とも呼ばれているのである。現在、大月市には小俣姓の家が多い。それも東部地区に集中している。そして小俣姓にかかわる史実もいくつが存在する。

七保町林を流れる川は小俣川と呼ばれている。賑岡町の小和田には、郡内の坂東三十三観音霊場の第二十四番札所、小俣堂という観音堂があった。そのご詠歌は「渡りえて心すずしき小俣川みのりの岸につくぞうれしき」というものであった。

その中に享保四年（一七一九）の年号と「小俣姓」の名が刻印されたものがある。小和田にあった小俣堂の本尊と共に移されたものである。賑岡町畑倉に春日神社があるが、小俣将監なるものが創建したと棟札に記されている。この畑倉地区にも小俣姓が多い。

さらに、小俣姓については、笹子の吉久保にある親鸞上人の念仏塚の縁起にも登場している。

昔、小俣某の葦という娘が嫉妬のあまり笹子川に身を投げ、毒蛇となって旅人を苦しめていたのを、たまにたま通るかかった親鸞上人がなだめ、悟りの道へみちびいたことからヨシが窪と呼ばれるようになったという。

このように大月市と小俣姓は長い歴史を秘めてかかわってきたように思われるのである。

この観音堂にまつられていた本尊は、馬頭観音像で、見事な木像彫刻である。現在には林の宝鏡寺に納められている。そしてそこには何体かの地藏尊像があるが、